

平成二十六年 度 入 学 試 験 問 題

国 語

(第一回)

注 意

- 一、問題冊子と解答用紙が配られたら、まず**解答用紙の決められたところに座席番号、受験番号、氏名**を書いてください。
- 二、試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 三、試験開始の合図があつたら、問題冊子のページ数を確かめてから始めてください。
- 四、この問題冊子は、**十二ページ**あります。ページの不足や乱れがあつたら、だまつて手をあげてください。
- 五、印刷のはつきりしていないところがあつたら、だまつて手をあげてください。
- 六、試験終了の合図があつたら、すぐに鉛筆を置いてください。
- 七、その後、解答用紙を集めますので、解答用紙を机の上に、表を上にして置いてください。
(問題冊子は持ち帰ってかまいません。)
- 八、国語の試験時間は**五十分間**です。(九時四十分を終了予定です。)

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。

飼いウサギの研究を一応打ち切って、私が高崎山（大分県）を訪れたのは、一九五三（昭和二十八）年の冬であった。その頃、伊谷純一郎さんは高崎山に常駐していて、すでに多くのサルサルの個体識別個体識別をしていた。彼はサルサルの名前や顔の特徴を親切に教えてくれたうえ、「こいつはずるい顔してる」とか「間が抜けている」といった、A相棒相棒に対する感想を述べてくれたが、聞いていて私はさっぱりピンとこなかった。穴のあくほどサルを見つめ、ようやく顔や特徴を覚えたとと思ったら、そのサルはどこかへ去り、次々に新しいAのAが現われる。指が欠けているとか、ホクロがあるといった特徴をもっているサルはともかく、次々に現われる二〇〇頭のサルサルの前に、私の記憶機能は完全に混乱に陥り、半分ノイローゼ状態になった。私はBウサギとは違った異質な多様さと喧騒けんそうとに彩られた、絢爛けんらんともいうべきサルサルの群れの中で

C した。私は個体識別能力には、いささか①ジフするところがあった。ウサギは表情もなく声もほとんど出さず、行動のうえの特色も少ないけれど、白一色のそれを見て即座に名前をいえたからである。だから表情の豊かなサルであつてみれば、もっと個体識別が②ヨウイに違いないと安心していただが、その自信はもろくも崩れ去つたのである。

しかし三日ほど動き回るサル③の中で暮らしていると、にわかにサルサルの顔覚えが楽になり出した。つまりはサル④のもっている雰囲気雰囲気が私の身体ににじみ込んできたからである。ウサギの世界は乾いた草原の単純な世界だし、サルサルの世界は多様で豊潤な森のそれだ。そのD棲み替えが私の心の中で起こつたのである。

人の顔を覚える④のに、私たちはホクロがあるから誰それだといった覚え方をしない。直感的に全体像を捉え認知するが、サルサルの場合も同じである。サルサルの群れの中にいてサルサルの放つ雰囲気雰囲気を身につけると、

かれらの顔、あるいは姿をひと目見るだけで、誰かということがわかるようになる。重要なことは群れが醸し出す雰囲気雰囲気を、自分の肉体を通じて感受することであつて、これは理屈ではない。群れの中に浸り、かれらと生活の場を同じくすることによってのみ感得し得るものである。

相貌認知そうぼうちんという、いまだに学問的に解決されていない人間の認知能力がある。ひと目でサルサルの個体がわかるのは、この⑤の相貌認知の作用によるものであるが、系統と生活感情の共通という、きわめて原始的な感覚のうえに、相互に通じ合う感情のチャンネルができる必要があるらしい。このチャンネルによってサルサルの生活を実感的に感知することが、私⑥のいう共感法なのである。

共感法は個体識別法に基礎を置き、そこから③ハッテンしたものである。人間の個体の面白さに魅かれるのと同じく、サルサルの個体の面白さに魅力を感じなければ共感法は成立し得ない。その根底には、サルを人間より下のものと見下さない心情がある。

こうした方法には根本的に④ギネンをもつ人があるだろう。特に外国の学者はこの方法に驚き、次いで俄然批判を加えてきた。すなわち、これは擬人主義に陥り、客観性を損うというのである。かれらは可能な限り自分たちによって自然をみださないように配慮するのを原則とし、天幕てんまくにこもってブラインドを通して野生動物を⑤カンサツするなどの方法を工夫していた。みなカンサツ者の存在による妨害をなくすためであつた。

この方法は従来のそのようなE欧米流の方法に対する明らかな挑戦だった。われわれは群れの中に積極的に入り込むことによって、むしろ客観性を確立し得たと考えている。なぜなら、前述したように、その方法によって自然群の中に順位テストといった実験的手法を導入し、科学的な分析が可能になるからである。

共感法は、優れてF日本的な発想のうえに構築された研究法である。それではその発想は一体、どこに

由来するものであろうか。私はそれを日本人の自然観と関わるものではないかと考えている。

欧米流のキリスト教的 세계観においては、神、人、動物（自然）が対立者として扱われ、その間に明確な断絶があり、優劣の秩序がある。このいわばタテの関係は絶対であって、人は天国に昇っても神になることはできないし、また動物はどこまでも人の対立者として位置づけられている。したがって、人は動物に対し残忍であり得るし、対立者としての融和と優劣のために秩序をつくりあげる。

ところが、日本人の心に浸透している仏教的 세계観は、「山川草木悉有仏性」という言葉が明らかにしているように、全てのものに仏性があり、その意味で平等の関係で繋がっているという考え方である。例えばキツネという動物（自然）は狩猟獣や害獣であるとともに、人を化かす妖怪として人間界に棲んでいるかと思うと、一方でお稲荷さんのお使い、つまり神の使者として現われる。どういうことかというところ、神、人、動物の関係が曖昧というより、三者がヨコの関係で繋がっていることを、いみじくもキツネという動物が示しているのである。日本では人は死ねば仏となり、神の座に同列に参加できるといわれる。それもこの水平の関係が根底にあるからであらう。したがって、日本人の自然観においては、動物はあくまでも人の対立者でもなく、異質の存在でもない。そこには連帯感、一体感が働いているのである。

サル研究グループの方法は、自然との一体感、連帯感といった、日本人のもつ自然観を根底として生まれたのに違いない。生きとし生けるものとしてサルと繋がりが合っているという宿命的な自然感こそ、共感法を成立させた根本だと思われるのである。

（河合雅雄 『学問の冒険』）

※1 絢爛 きらびやかで美しいさま

※2 豊潤 豊かでうるおいがあること

※3 天幕 テント

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部A「相棒」という表現から筆者のどのような心情がわかりますか。本文より二十字以内で抜き出しなさい。

問三 二重傍線部④「の」と同じ使い方をしているものを本文の二重傍線部⑥～⑩から一つ選び記号で答えなさい。

問四 傍線部B「ウサギとは違った異質な多様さと喧騒」とはどういうことですか。三十五字以内で答えなさい。

問五 C に入る語句を次の中から選び記号で答えなさい。

ア 喜怒哀楽 イ 茫然自失 ウ 泰然自若 エ 右往左往 オ 自暴自棄

問六 傍線部Dについて、どうすることで「棲み替え」が起こったのですか。具体的な方法を説明した部分を三十字以内で探し、最初の五字を答えなさい。

問七 傍線部E「欧米流の方法」とはどういう方法ですか。簡潔に答えなさい。

問八 傍線部F「日本的な発想」について、次の説明文の空欄に入る最も適した語句を本文中より探して答えなさい。ただし、Ⅰ、Ⅱは熟語で、Ⅲは五字で抜き出しなさい。

日本では、人が死ねば仏となり得るが、欧米では神と人は対立した関係にありⅠ な関係にはならない。一方、神、人、動物がⅡ の関係にある日本ではⅢ は生まれなかった。

問九 本文の内容に一致するものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 穴のあくほどサル顔を見つめていくうちに、サル顔や特徴を覚えられようになり、人の顔を覚えるのと同じような感覚を覚えた。

イ 理屈抜きでサルの群れの雰囲気をも自分の身体を通して感じ取り、直感的に全体像を捉え認知することによってサルの顔を覚えられようになった。

ウ サルと人間が通じ合う感情のチャンネルは訓練の結果生じた特殊な能力であり、互いに歩み寄る姿勢が大切なのである。

エ 自然との連帯感、一体感は日本人特有の感覚であり、日頃から仏教を信じ敬ってきた心が動物愛護の精神を養った。

オ 欧米では共感法に対して客観的でないと批判をしているが、実際のところ、欧米の方法よりも日本の方法の方が合理的である。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

あらすじ

太郎は、「ぼく」の友人の紹介で、「ぼく」の画塾へ来ることになった。太郎は、内気で神経質そうな少年で、通い始めてから何日たっても画を描こうとしなかった。ある日、一人ぼっちで画筆をいじっていた太郎は、画塾の生徒の一人のエビガニ釣りの話に興味を示した。そのとき、太郎の口から「ズルメで釣ればいいのに……」のつぶやきがもれた。

その言葉に気づいた「ぼく」は、彼をつれて川原へでかけることを思いついて、太郎の家をたずねた。

しばらく応接室で待っていると太郎が小学校から帰ってきた。彼は部屋に入ってきてぼくを発見すると、おどろいたようにA顔を赤らめたが、夫人にいわれるまま、だまってランドセルを絵具箱にかえて背にかけた。そんな点、彼はまったくB従順であった。夫人は自動車を申しでたが、ぼくはことわった。太郎はデニムのズボンをつけ、ま新しい運動靴をはいた。

「汚れますよ」

ぼくが玄関で注意すると、太田夫人はいんぎんに微笑した。

「先生といっしょなら結構でございます」

口調はいいねいですが、ぼくはそのうらになにかひどくなげやいなものを感じさせられた。いわれないことであつたが、その違和感は川原につくまで消えそうに消えず、妙にしぶとくぼくにつきまとってきた。

太郎をつれて駅にゆくと、ぼくは電車にのり、つぎの駅でおりた。そこから堤防まではすぐである。ぼ

くのいそぎ足に追いつこうとして太郎は絵具箱をカタカタ鳴らしつつ小走りに道を走った。月曜日の昼さがりの川原はみわたすかぎり日光と葦と水にみちていた。対岸の乱杭にそって一隻の小舟がうごいているほかにはひとりの人影も見られなかった。小舟は進んだり、とまったりしながらゆっくり川をさかのぼっていた。広い空と水の中でひとりの男がシガラミをあげたり、おろしたり、いそがしく舟のなかでたち働く姿が小さくみえた。ぼくは太郎をつれて堤防の草むらをおりていった。

「あれは魚をとってるんだよ」

「……」

「こんな大きな川でもウナギやフナの通る道はちゃんとしまっているんだ。だからああして前の晩にシガラミをつけておくと、魚はこりやいい果があると思ってもぐりこむんだよ」

橋脚だけがのこされたコンクリート橋のしたでぼくと太郎は腰をおろした。橋は戦争中に爆撃されてからとりこわれ、すこしはなれたところに鉄筋のものが新設された。強烈な力の擦過した痕跡は、いまだ川のなかののこされたコンクリート柱だけで、爆弾穴は葦と藻に蔽われた、静かな池にかわっていた。太郎は腰をおろすと、絵具箱を肩からはずし、スケッチ・ブックをあげようとした。ぼくはその手をとどめて、右の眼をつぶってみせた。

「今日は遊ぼうや。カニでもとろうじゃないか」

「だって、ママが……」

ぼくはつぶった眼をあけ、かわりに左の眼をつぶって笑った。

「画は先生がもって帰ったっていいばいよ」

「うそをつくんだね？」

C 太郎はませた表情でぼくの顔をのぞきこんだ。ぼくはだまってたちあがると、葦の茂みのなかへ入っ

ていった。

葦をかきわけて歩くと、一足ごとに、泥がそのまま流れるのではないかと思うほどおびただしい数の川ガニがいつせいに走った。ぼくは太郎といっしょに彼らを足でつぶしたり、つかまえたりした。はじめのうち太郎は泥がつくことをいやがっていたが、そのうち靴にしみが一点ついたのをきっかけに、だんだん大胆に泥のなかへふみこむようになった。カニを追うたびに彼の手は厚く温い泥につきささり、爪は葦の根にくいこんだ。やがて彼がひとりで小さな声をあげつつ茂みのなかを這いまわりはじめた頃をみはからって、D ぼくはあたりに水たまりがないことをみとどけ、もとの爆弾穴のほとりへもどった。

ぼくが葦笛をつくることに没頭していると、しばらくして太郎が手から水をしたたらせてもどってきた。彼は足音をしのばせつつやってくると、ぼくのまえにたち、青ざめて

「先生、コイ……」

そういったままあえいだ。

「どうしたんだい？」

I

彼はぬれた手でいらだしげに①額の髪をはらい、ぬき足さし足で池にもどっていった。そのあとについていくと、彼は水辺でいきなり泥のうえに腹ばいになった。ぼくは彼とならんで葦の根もとにねそべり、おなじように池のなかをのぞきこんだ。ぼくの腕のよこで太郎の薄い②肩甲骨がうごいた。彼は温い息をぼくの耳の穴にふきこんだ。

II

彼のさしたところには厚い藻のかたまりがあった。それは糸杉の森のように水底から垂直にたっていた。日光が水にすきとおり、森の影は明るい水底の砂の斜面におちていた。たしかにこの水たまりの生命はそ

の暗所にあるらしかった。さまざまな小魚や幼虫や甲虫類が森をかきわけて砂地の広場にあらわれると、しばらく日なたぼっこして、また森の奥へもどっていくのがみえた。

ぼくは太郎といっしょに息を殺して水底の世界をみつめた。水のなかには牧場や獵林や城館があり、森は③気配にみちていた。池は開花をはじめたところだった。水の上層にはどこからともなくハヤの稚魚の編隊があらわれ、森のなかでは小魚の腹がナイフのようにひらめいた。ガラス④細工のような川エビがとび、砂のうえではハゼが楔形文字を描いた。ぼくは背に日光を感じ、やわらかい風の縞を額におぼえた。

E池の生命がほぼ頂点に達したかと思われた瞬間、ふいに水音が起つて、ぼくは森に走りこむ影をみた。ハヤは散り、エビは消え、砂地にはいくつものけむりがたつた。影の主の体重を示して森の動揺はしばらくやまなかった。ぬれしよびれた顔を水面からあげて、太郎はあえぎあえぎつぶやいた。

III

呆然として彼はぼくをふりかえった。彼の髪は藻と泥の⑤臭いをたて、眼には熱い混乱がみなぎっていた。そのつよい輝きをみて、F案外この子は内臓が丈夫なのではないかとぼくは思った。空気には甘くつよい汗の香りがあった。

(開高 健 『裸の王様』)

※1 シガラミ 水流をせきとめるために、川の中に打ち並べたくいの横に竹や木の枝を結びつけたもの。

※2 楔形文字 くさむがた 古代オリエントで広く用いられた文字。粘土板に葦の茎などで刻まれたのでくさびに似た形をとる。

※3 縞 しま 筋のような模様。

問一 傍線部①～⑤の読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部A「顔を赤らめた」のはなぜですか。適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」がなぜ自分の家にいるのか理解できず迷ったから
- イ 先生とはいえ「ぼく」が自分の家に入り込んでいることにあきれたから
- ウ 母親がいるところで「ぼく」と接することが恥ずかしかったから
- エ 「ぼく」が自分の家に来ていたことがあまりに意外だったから
- オ 「ぼく」が出かけるために迎えに来たのがわかり興奮したから

問三 傍線部B「従順」の意味を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 考えずに行動すること
- イ 思い通りに行動すること
- ウ 素直に行動すること
- エ 文句を言わずに行動すること

問四 傍線部C「太郎はませた表情でぼくの顔をのぞきこんだ」とありますが、このときの太郎の心情について、最も適切なものを次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」と秘密を共有することを了解し信頼する気持ち
- イ 「ぼく」の事情を察知し「ぼく」の機嫌をとろうとする気持ち
- ウ 「ぼく」の行動を非難しつつも信じていいものか迷う気持ち
- エ 「ぼく」と心を通わせはじめながら「ぼく」に寄り添う気持ち
- オ 「ぼく」と行動を共にすることを正当化し安心する気持ち

問五 傍線部D「ぼくはあたりに水たまりがないことをみとどけ、もとの爆弾穴のほとりへもどった」とありますが、「ぼく」のどういう意図がわかりますか。説明しなさい。

問六

I

Ⅲ

 に入る会話を次の中から選びそれぞれ記号で答えなさい。

- ア あそこに逃げたんだよ
- イ コイだよ、先生。コイが逃げたの
- ウ 逃げちゃった……

問七 傍線部E「池の生命がほぼ頂点に達した」とはどういう様子のことですか。簡潔に説明しなさい。

問八 傍線部F「案外この子は内臓が丈夫なのではないか」という表現からどのような「ぼく」の心情がわかりますか。一つ選び記号で答えなさい。

- ア 困惑 イ 歓喜^{かんき} ウ 安堵^{あんど} エ 憤怒^{ふんぬ} オ 失望

問九 本文の内容と一致するものには○、異なるものには×をそれぞれ答えなさい。全て○、あるいは全て×にしてはいけません。

- ア 「ぼく」は以前から太郎に絵を教えているが、今回は太郎の母親の反対を押し切って、近くの堤防まで太郎を連れ出した。
- イ 「ぼく」は写生を口実に太郎を連れ出したが、太郎がどんなことに興味を持つかはすっかりわかっていていた。
- ウ コイを見つけた太郎はすっかり夢中になり、「ぼく」が近づいてきたことにさえも気づかなかった。
- エ 「ぼく」が太郎と水底の世界をみつめていると、水のなかには陸と同じような景色が広がり、小さな生命が暮らしていた。
- オ 太郎の母親が、「ぼく」を信用するようなことを言ったが、「ぼく」には本心とは思えず心に引っかかっていった。

問題は以上です。

座席番号	受験番号	氏名

一

問一

①

②

③

④

⑤

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

二

問一

①

②

③

④

⑤

い

問二

問三

問四

問五

問六

I

II

III

問七

問八

問九

ア

イ

ウ

エ

オ

※

※

※